

インタラクティブ空間演習 (女子美術大学大学院)

記号内容とは「意味」か「指示物」か？

3章 「1. 記号と意味作用」 pp.88-98
(2014-09-24)

池上嘉彦 著「III. 創る意味と創られる意味—意味作用をめぐる—」、『記号論への招待』

担当： 石井 拓洋
ishii05042@venus.joshibi.jp

2014

「言語名称目録観」

ソシュール以前の外界認識モデル

最初に物などが存在する。人は物にラベルをつける。それによって外界を認識する

(外界 = 物など) (記号 = 言語) (外界認識)

犬 → 犬

山犬 → 山犬

オオカミ → オオカミ

© Takuyo ISHII (Joshibi Univ.), 2014

「言語論的転回」以後

ソシュール以後の外界認識モデル、記号論の視点

人の価値観に基づいて本来は〈区分的ない〉外界を記号を用いて〈区分的〉。そして外界を認識する。

(外界認識) ↔ (価値観 = コード) (記号 = 言語) ↔ (外界 = 物など)

「かわいいやつ」 → 犬 → 犬

「野生的なやつ」 → 山犬 → 山犬

「危険なやつ」 → オオカミ → オオカミ

© Takuyo ISHII (Joshibi Univ.), 2014

「3-1. 記号と意味作用」 pp.66-109 ここで述べられることは？

「3-1. 記号と意味作用」 (pp.66-109) で述べられることは？

復習

- 本章では「記号の意味作用」の問題を考えてみる (p.67)
- 【記号の本質的はたらき = 対象界の分節】

記号はさまざまな対象、現象の中から「同じ」意味、「同じ」価値を持っているものをまとめあげる。「異なる」意味、「異なる」価値をもつものを差別化する。(p.76)

- 「同じ」か「異なる」かの判断、つまり「対象界の分節」すること、これを規定するのが「コード」である。(p.77)

「3-1. 記号と意味作用」 pp.66-109 ここで述べられることは？

「3-1. 記号と意味作用」 (pp.66-109) で述べられることは？

復習

- 「記号表現」と「記号内容」は完全な自己同一性の条件を満たしてなくてもよい。むしろその方が普通である。(p.75)

(記号表現) (記号内容)

= 「平和」

= 「平和」

さまざまな鳩が「平和」を示す。

イラスト提供: M/V/D/S GRAPHICS <http://myds.jp/>

「3-1. 記号と意味作用」 pp.66-109 ここで述べられることは？

「3-1. 記号と意味作用」 (pp.66-109) で述べられることは？

復習

- 「記号表現」での「同じ」と「異なる」を考える

- 「銀河」での /が/ 音の発音は、[g]でも[ŋ]でも「銀河」と認識されるなぜか？ → それが日本語の「コード」だから。(p.81)

- 「銀河」の発音での、[g]と[ŋ]についての視点 (p.82)

→ 「銀河」として共に認識される。だから「同じ」 = イーミックな視点

→ 科学的に違う音声である。だから「異なる」 = エディックな視点

「3-1. 記号と意味作用」 pp.66-109 ここで述べられることは？

「3-1. 記号と意味作用」 (pp.66-109)

で述べられることは？

復習

- 「イーミック」とは、対象の文化の一員として**コードを重んじる視点** (p.79)
- 「エティック」とは、**科学的な視点** (p.79)
- 記号とは、一般に、「イーミック」な視点で捉えられるものである。

例) 銀河の「が」は、「言語音 /が/」という「恒常的・不変的な」判断基準が存在する。

実際には「/が/」音には、[g]と[r]など、多少の変種がある。「イーミック」な視点では、上記は「同じ」である。

「記号内容」——「意味」か「指示物」か pp.88-92

意味作用をめぐる「記号内容」側の問題

「記号内容」を規定するのは「指示物」か「意味」か？

「記号内容」——「意味」か「指示物」か pp.88-92

記号内容としての「指示物」とは？

「記号表現が示す**特定の具体的な個体ないし事例そのもの**」(p.88)

(記号表現) → (記号内容 = 「指示物」として)

「鈴木太郎」 → 

固有名詞的 → 特定の具体的な個体 鈴木太郎くん、そのもの

- ・ 記号表現としては限られたケース (p.90)
- ・ 記号使用者にとって、特に価値のある指示物に限られる (p.90)
- ・ 全て固有名詞的記号であれば、数が膨大となり、人間は運用不可能 (p.90)
- ・ 記号が適用できる世界が「閉ざされた」ものとなる。 (p.92)

「記号内容」——「意味」か「指示物」か pp.88-92

記号内容としての「意味」とは？

「記号表現が**適用されるために**指示物が満たしているべき条件」(p.88)

(記号表現) → (記号内容 = 「指示物」として)

「子ども」 → 

・ 普通名詞的
・ 適用条件: 年齢が低い人

・ 年齢が低い人 たち
・ 年齢が高い人とは違う人 たち
・ 「同じ価値」を共有するもの

- ・ 「普通」の記号表現としてのモデル (p.91, 93)
- ・ 多くの場合は、一つの記号の適用は同じ価値を有する一連の対象(指示物)に適用 (p.91)
- ・ 記号が適用できる世界が「開いた」ものとなる (p.93)
- ・ 新しい対象でも、「意味」の規定にあっていれば適用が可能である (p.92)

「記号内容」——「意味」か「指示物」か pp.88-92

記号内容としての「指示物」とは？

「記号表現が示す**特定の具体的な個体ないし事例そのもの**」(p.88)

(記号表現) → (記号内容 = 「指示物」として)

「鈴木太郎」 → 

固有名詞的 → 特定の具体的な個体 鈴木太郎くん、そのもの

「連続性」の保証と「一般化」の可能性 pp.93-96

人間の言語では「記号」は**普通名詞的に**使用される

- 「記号内容」は「指示物」ではなく「意味」として規定される
- 人間の言語では「記号内容」は「意味 = 同じ価値を有するもの」として規定
- それが自然な規定 (p.93)

▼「記号内容」が「意味」として規定される例

(記号表現) → (記号内容 = 「指示物」として)

「子ども」 → 

・ 普通名詞的
・ 適用条件: 年齢が低い人

・ 年齢が低い人 たち
・ 年齢が高い人とは違う人 たち
・ 「同じ価値」を共有するもの

「連続性」の保証と「一般化」の可能性 pp.93-96

人間の言語では「記号」は普通名詞的に使用される
 - 「記号内容」は「指示物」ではなく「意味」として規定される

- 日常生活では「同じ出来事」を、実際には「異なる形」で遭遇する事例が多い

例) 「毎朝乗る 八時発の急行」

〈同じ出来事〉 = 「毎朝乗る 八時発の急行」 (イミミックな視点)
 〈異なる形〉 = 「日ごとに、実際の車両や乗客は異なっている」 (エミミックな視点)

→ このような「同じ出来事」によって

人間の生活の「連続性」が保たれる

(p. 93)

「記号内容」——「意味」か「指示物」か pp.88-92

太郎くんが変化しても、、、 (p. 93-94)

「指示物」を記号内容とする場合

「太郎」
固有名詞的

太郎くんは やせたり、ふとったりして変化する。しかし、、、

- ・ 太郎くんは、厳密には常に同一ではない。日ごとに「気分」、「体型」、「装い」が変わる
- ・ しかし、固有名詞的記号「太郎」は、つねに太郎くんを指し示す。
- ・ この意味では「固有名詞的」な「太郎」も、「普通名詞的」に使用されることがある
- ・ ただし、「太郎」の語は、次郎くんや、三郎くんを（指示）するように変化することはない。

「記号内容」——「意味」か「指示物」か pp.88-92

言語「かたくな」が変化すると、、、 (p. 94)

「意味」を記号内容とする場合

変化前 → 「かたくな」なるもの (普通名詞的) → 変化後

「意地っ張り」 (意味が変化) → 「伝統を守る一途な態度」

- ・ 適用される「記号内容」があまりに変化すると、「意味が変わった」と認識される

「記号内容」——「意味」か「指示物」か pp.88-92

「同じ犬」と「同じ花」のちがひ (p. 95)

「同じ犬」

(うちのポチ) → (隣のタロ) × (うちのポチ) ○

「同じ花」

(うちのチューリップ) → (隣のチューリップ) ○ (うちのチューリップ) ○

- ・ 〈動物〉 → 〈植物〉 → 〈無生物〉の域に入っていくにつれて、、、
- ・ 「個体としての自己同一性」を強調するだけの文化的意味が次第に認め難くなる (p.95)

新しい経験を処理する枠 pp.96-98

記号の連続性の意義 – 未知なるものを探る (p. 96-98)

- ・ 記号の連続性(「毎朝8時の急行」の「同じ」)は、未来への方向性をもつことに意義あり
- ・ この「連続性」を拠り所として、われわれは、「はじめての事態」を解明しようとする
- ・ はじめての事態に対して、人間はまず、従来の経験の枠をあてはめて解明を試みる
- ・ 「経験の連続性という仮説に立て、それを未来に投影してみる」(p.96-97)
- ・ 「大体はそれで処理出来る」 → 「異なるが同じ」という性格のものが多から
- ・ 真に新しいものとの遭遇 の場合は? → 新しい記号の創出、コードの修正、

新しい経験を処理する枠 pp.96-98

詩「ごびらっふの独白」 草野心平 (1903-1988) (pp. 97-98)

- ・ 「蛙の詩人」と言われ、生涯にわたってカエルをテーマとした詩を書きつづけた。
- ・ この詩は、1928年に刊行した初の詩集となる『第百階級』に収録された詩。
- ・ 「ごびらっふ」とは一匹のカエルの名前らしい。
- ・ この詩は、「カエル語」で書かれたものらしい。

朗読「ごびらっふの独白」
<http://www.youtube.com/watch?v=e3RJA19QJWA>

合唱曲《ごびらっふの独白》高嶋みどり(作曲)、草野心平(作詞)
<http://www.youtube.com/watch?v=BjjJ2x0nqOU>

